授業名　　学籍番号　S09（アルファベット・カナ表記）
予備調査

非言語表現

1. はじめに

この論文の目的は、大学院のゼミの談話における非言語表現について、多人数の談話にどのように説明するかによって明らかにすることである。

留学生教育にとって、大学院のゼミの談話を分析することによって、留学生たちがゼミなどの多人数の談話で説明の方法を身につけ、より参加しやすいというメリットがある。特に、多人数の相手に説明するときに、普段に気づいていない非言語表現がその内容を聞き手にわかりやすいために、どんな表現が選ばれるか、そしてどんな役割を果たすのか。この問題が答えられれば、日本語学習者は多人数の談話に使った自然な身振りを知り、ゼミだけではなく、たいてい会議がもより参加しやすくなるであろう。

2. 先行研究と本研究の位置づけ

大学院のゼミの談話における非言語表現について扱った研究には、ザトラウスキ（2002，2010）や西尾（1997）などがある。

まず、ザトラウスキポリーが 2002 年に発表した『日米におけるアニメーションのストーリー語り方と非言語行動の相違』は、日本人とアメリカ人を被験者をし、セリフがないアニメーションを見させるから、母語と非母語の言語（日本語と英語）でそのアニメーションの内容を語ってもらい、その結果を分析するという内容であった。

次に、ザトラウスキポリーが 2010 年に発表した『講義の談話の非言語行動』は、授業を対象に、講義者はどのような時に身振りを用いるのかという問題について、まず身振りを七種類に分かれ、講義者の台詞と身振りを文字で併せて記録し、分析するという内容であった。

そして、西尾新が 1997 年に発表した『発話に伴う身振りの表記法作成の試み』は、研究の背景として、身振りの①情報を反映する、②発話に詰まった状態にも語彙アクセスを容易にしているという性質を紹介し、そして、表記規則を知らせし、最後に、その表記を用いてからの発見と表記法の問題を挙げる。

しかし、大学院のゼミの談話を対象に、多人数の談話のとき（特に学術の談話）の説明の仕方という観点から扱った研究はない。そこで、私は多人数の談話に用いている非言語表現で分析を行うことにしたい。

この分析で、今まで分析していなかったゼミの中において非言語行動がどのように内容の伝達に支えるかと明らかになり、日本語特別な身振りがどのように多人数の談話に働くかということが解明し、日本語教育に良いと考えている。

3. 研究の資料と分析の方法

研究の資料は、2015 年 9 月に、神奈川県の三浦半島のホテルで行われた都内の大学院の某ゼミマールの 40 分程度の談話二つを文字化したものである。

一つは、絵本を日本語の読解クラスのテキストにするという内容が発表したあと、発表者と質問者ＡＢと先生の討論のビデオであった。

もう一つは、日本語学習者が日本語の論文を書くときに悩むことをアンケートしたあと、各々の因子について討論するというビデオであった。

そして、その文字化データから非言語表現観点からデータを抽出し、多人数の談話の時の説明の仕方によって分析を行った。

4. 分析の結果

非言語表現を使うのは、たいていこのとき：

① 自分の感情を表すとき：「あとは、平均値を求めて、次にあのうー」｛顎を触る｝のように、台詞がまだ終わっていないうち、次の内容を考えていた。

② 抽象の概念を説明するとき：「男性と女性とか？｛両手でバランスのように｝」と二つの相対な分類でデータを分析する方法を提案することき概念の関係性を具現化する。あるいは「不安」という単語を言うと手か震え、不安の様子をする。

③ 強調するとき：話段に三回も「共通因子」と言ったとき、両手で括弧の形をかくという同じ身振りをする。

④ 言葉と同じ情報を伝えるとき：「っと思って」｛両手のひらを合わせ、視線が机に向く｝

5. 実行の問題点

① 話し手が気づいていない身振りを分析するということが意味があるか。つまり、分析したあと、実際に教えるなど応用はできるか。

② 身振りを使ったのは、使わなかったより分かりやすいという判断がしにくい。

③ 人によって身振りをたくさん使う人がいるが、あまり使わない人もいる。そうすると、最後によく使う人をしか対象にし分析を行い、分析の結果が歪んでいるという恐れがある。

④ 身振りの表記をどうすれば分かりやすいか

⑤ 身振りの分類は研究者によって様々があり、どちらに選ぶか。